

# あやかし鬼嫁婚姻譚

～選ばれし生贊の娘～

朧月あき Aki Oboroduki



アルファポリス文庫

## 目次

第四章	運命の花嫁	
第三章	花菱家との因縁	
第二章	鬼の生贊	
第一章	惹かれる心	

232      137      60      5

## 第一章 鬼の生贊

ドンッ！

光沢のあるローファーに勢いよくお腹を蹴られ、花菱里穂はしりもちをついた。手から落ちたペットボトルが、芝生の上を転がる。

「どうしてレモンティーを買ってくるのよ！ ミルクティイって言つたでしょ！」

痛みに耐える里穂を高压的な態度で見下ろしているのは、妹の麗奈だ。妹といつても、里穂と麗奈は同じ十六歳。血の繋かりはない。

砂糖菓子のような甘い顔立ち、榛色の瞳と薄茶色の波打つ髪を持つ麗奈には、生まれ持つた華やかさがある。

一方の里穂は、これといった特徴のない顔立ちに、黒い瞳と真つすぐな黒髪。地味を突き詰めたような容姿で、本当の姉妹でないことは一目瞭然だった。

昼休みの今、校舎裏に位置するこの芝生広場では、大勢の生徒達がお弁当を広げている。騒ぎに気づいた彼らの視線が、一斉にこちらに集中した。

「相変わらず、役に立たない女ね！」

「ごめんなさい……」

蚊の鳴くような声で、里穂は謝った。

「なに？ 聞こえなーい」

「三歳児<sup>みどり</sup>でもできるおつかいじやない。これだから無能な人は困つたものね」

みじめな姿をさらす里穂に、麗奈の取り巻きの女子達がクスクスと嘲笑を浴びせる。

自分に非がないことが分かっていても、麗奈の『下僕』である里穂は、反論できる立場はない。こういうときは、ひたすら謝る以外すべがないことを、もう嫌というほど知っていた。

うつむき、制服のプリーツスカートを見つめながら、嵐が過ぎ去るのをいつものようじっと待つ。

「さつさと買い直ってきて！ 本当はあなたが触ったものに触れるだけでもイヤなのよ。それなのにこうして挽回の機会をもらえてありがたいと思いなさい！」

麗奈は声高に言い放つと、くるりと踵<sup>きびす</sup>を返して校舎の方に去っていった。

取り巻きの女子達も、里穂に侮蔑<sup>ぶべつ</sup>の視線を残して、ぞろぞろと麗奈のあとに続く。ひとりその場に取り残された里穂は、そこかしこから聞こえるヒソヒソ声を耳にしながら立ち上ると、転がったペットボトルを拾おうとした。

だが、一足先に伸びてきた手にかつさらわれる。

里穂が拾うはずだったペットボトルを手にして立っていたのは、麗奈の双子の弟の煌<sup>こう</sup>だつた。

姉によく似た、癖のある薄茶色の髪と、輝く榛色<sup>はしばみいろ</sup>の瞳。

甘い仔犬顔でにこつと笑い、無邪気に小首を傾げてくる。

「里穂、大丈夫？」 麗奈がまたいじわるして『ごめんね』

とたんに、辺りにいた女子生徒達がキャラッと黄色い声を上げた。

「煌くん、天使！ あんな女を助けるなんて、なんて心優しいのっ！」

美少年なうえに心まで清いなんて、どこまで尊いのかしら！」

人懐っこく優しい煌は、この学校の女子のアイドル的な存在だ。

「あ、ありがとう……」

里穂は、恐る恐る差し出されたペットボトルを受け取ろうとした。

そのとき、わずかによろめいたせいで、煌の靴に足先が当たってしまう。にこにこと微笑む彼の顔が一瞬だけ凍り付いたことに気づいて、里穂は青ざめ、ペットボトルを受け取るなりその場を離れた。

かつて、あやかしすらひれ伏したという花菱家の血の恐ろしさを、今日も今日とて身に染みて感じながら――

あやかし界と人間界。

この国は、異なるふたつの世界から成っている。

古くから、人間はあやかしの悪行に悩まされてきた。

特異な能力を持ち、力も強いあやかしは、非力な人間にとつて脅威以外の何物でもない。

だが、約三百年前。ある大名が、あやかしの帝を説き伏せ、人間界でのあやかしの悪行を一切禁じるという約束を得た。

それ以降あやかしはピタリと悪さを働かなくなり、人間界には平和が訪れる。

人間達は彼にたいそう感謝した。

その誉れ高き大名の血を引いているのが、花菱家だ。

社会的地位、財力ともに申し分なく、おまけにそろつて容姿端麗。誰もが一日置く一族である。

だが、そんな花菱家のなかで、里穂だけが特異だった。

里穂は、十歳のときに養護施設から花菱家に引き取られた養女だ。

身寄りがなく、見た目も地味な里穂を、花菱家人間は蔑み見下した。

養母の蝶子は里穂を使用人のように扱い、必要なものすら満足に買ひ与えない。

そのため里穂は、もう何年も同じ服を着回している。薄汚れ、綻んだ箇所を繰り返し繕つてているため、生地はヨレヨレだ。

『なんてみつともないの、花菱家の恥ね』

『ちよつと、近寄らないでよ！ 一緒に歩きたくないわ』

蝶子と麗奈は、そんな心無い言葉を投げつけ、ぼろ雑巾のような成りの里穂をますます嫌悪した。

通っている。

そんな麗奈を、姉思いの優しい子だと、蝶子は声高に誉めそやした。

だが麗奈の真の目的は、学校でも里穂を下僕扱いし、利用することだった。

使い走りとして物を買いに行かされるのは日常茶飯事で、水をかけられたり、物を

隠されたりといった、小学生並みの嫌がらせも毎日のように繰り返されている。

それだけではない。

男遊びが激しく、自分の友人の彼氏ことごとく関係を持つている麗奈は、浮気がバレそうになるたびにその罪を里穂になすりつけた。相手の男も麗奈を恐れて真実を言わないので、里穂は男狂いのふしだら女というレッテルまで貼られている。

そのため、校内で里穂が麗奈にいびられているのを見ても、皆助けたりかばつたりはしない。

むしろ、『ふしだら女を諫める正義感溢れる妹』と麗奈を称えていた。

そんな状況下でも、里穂は、皆に真実を伝えようとは思わなかつた。

十歳の頃からひたすら存在を否定され続けているため、悲しいかな、みじめさが体に染みついているのだ。最近は、いびられるのを当然のようにすら感じている。

それに、たゞえ真実を口にしたところで、皆、里穂の言い分など信じないだろう。学園の汚点のような里穂と、蝶よ花よともてはやされている麗奈なら、誰しも麗奈の肩を持つ。

一方の煌は、姉の麗奈と違つて里穂に優しく、皆から天使と呼ばれて愛されていた。けれども、それはあくまでも表向きの姿なのである。

### 夕方の花菱家。

いつものように使用人にまじつて夕食の支度をしていた里穂は、食材を取りに裏庭にある貯蔵庫に向かつっていた。その途中、背後からいきなり髪をむんづと掴まれる。そして、貯蔵庫の裏に無理やり引きずりこまれ、力任せに壁に押しつけられた。

『天使』という呼び名からは考えられない、醜悪な顔をした煌が目に映る。

「おい、どうしてくれるんだよ。靴が腐っちゃつただろ？ 僕に触つていいくつ、いつ言つた？」

昼休みのとき、里穂の靴が彼の靴に触れたことを非難しているのだ。

煌は、表では里穂をいたわっているが、裏では他の誰に対するよりも尊大な態度を

とつていて。そして、こうやつて誰もいない隙を狙つて里穂をつかまえ、執拗にいびり倒す。

これも、花菱家に来た頃から繰り返されてきたことだつた。

「ごめんなさい……」

壁に押しつけられた際に頭をぶつけ、ヒリヒリと痛みが走る。追い打ちをかけるよう、煌が彼女の胸倉を荒々しく掴んだ。

「舐めて、キレイにしろよ」

「え……？」

「害虫のお前にできることなんてそれくらいだろ？ 分かっただんならさつさとやれ」

乱暴に放り出され、里穂は地面に倒れ込んだ。

痛みに顔を歪める里穂の目の前に、上質な黒のローファーが突きつけられる。

「ほら、さつさとしろよ」

靴先で顎を二度三度つかれ、里穂は尻込んだ。

だが、抵抗しようのなら、煌はいつそ嫌がらせをしてくるだろう。彼のそういうった陰湿ないびり方は、麗奈の露骨なやり方よりもある意味タチが悪い。

里穂は心を無にして、靴先に顔を近づける。

そつと舐めると、なんともいえない苦い味が口の中に広がつた。

「本当に舐めてやがる。きつたねー」

ヒイヒイと声を震わせながら、煌が笑う。

「家畜でも靴なんか舐めないと、お前は畜生以下だな！ ほら、もっと舐めてキレイにしろ」

喉を蹴られ、里穂は咳き込んだ。

だがすぐに、彼の言うとおり、丹念に靴に舌を這わせる。喉の奥からぐつと吐き気が込み上げたが、バレないように呑み込んだ。生気のない目で必死に自分の靴を舐める里穂を、煌は嘲笑を浮かべながら眺めている。

そのとき——

「煌、どこにいるの？ 一緒に買い物に行く約束してたでしょ？」

愛猫を呼ぶような甘つたるい麗奈の声がした。

肩を揺らした煌は、跪いている里穂の腕を力任せに引き上げる。

無理矢理立たされた里穂は、そのまま煌の胸に引き寄せられた。それから、両腕を彼の背中に強制的に回される。

とつさに逃げようとしたが、煌の腕がそれを許しはしなかった。

同時に、貯蔵庫の陰から麗奈が顔を覗かせる。

里穂が煌に抱き着いているように見える光景を前に、ブラコンの麗奈はあきらかに動搖していた。

「ちよつと、何してゐるのよ……！」

すると頭上から、グスン、と鼻をする音がする。

先ほどまで醜悪な嘲笑を浮かべていたはずの煌が、いつのまにか天使の顔に戻つて、ボロボロと涙をこぼしていた。

「里穂に迫られたんだ。働いてばかりで心配で、ただ声をかけただけなのに。まさか、こんなことされるなんて……」

「あの、これは……！」

さすがに反論しようとした里穂の声を遮るように、煌が「ううっ！」と大きな嗚咽を響かせる。そして、両手で顔を覆つてさめざめと泣きだした。

その様子を見た麗奈は、般若の形相でわなわな震えている。

「このアバズレ女！ 煌に手を出すなんて信じられない！」

麗奈は喰き散らすと、愛してやまない弟から里穂を引き剥がし、突き飛ばした。栄養不足のせいで平均体重よりも著しく軽い里穂の体は、あつけなく地面に転がる。衝撃で肘や膝をすりむき、じくじくとした痛みが全身に走つた。

「おーよしよし、怖かつたわね。お姉様が来たから、もう大丈夫よ」

肩を震わせている煌を抱き締めると、自分によく似たその薄茶色の髪をいたわるようになに撫でる麗奈。それから、まるで汚物を見るかのごとく里穂を睨んだ。

「ママに言いつけてやるんだから！ 覚悟なさい！」

麗奈に抱き締められている煌が、嗚咽をこぼしつつも意地悪く口角を上げたのが、地面に這いつくばつている里穂にだけははつきり見えた。

曇天の夜空から、はらりはらりと冷たい雪が降っている。

花菱家の裏門前にうずくまり、里穂はひとり震えながらその情景を眺めていた。あのあと、蝶子にこっぴどく侮蔑の言葉を浴びせられ、繰り返し頬をはたかれた。

どんてん

あげく、罰として着の身着のまま外に放り出された。

寒空の中、屋外で夜を明かせというのである。

学校から帰宅してすぐに夕食の手伝いをしていた里穂は、ブレザーの制服姿のままだ。

十二月に入つたばかりといえ、今宵は凍えるほど気温が低い。ブリーツスカートの下は素肌で、すでに何時間も冷氣にさらされているため、もはや感覚がない。かじかんだ手も、何度息を吹きかけようともに戻らなかつた。

それなのに、すりむいた肘と膝、それからはたかれた頬の痛みだけは消えてくれない。

どんな仕打ちを受けようと、もう悲しくない。

怒りの感情も湧き起こらない。

それは、花菱家で生き抜くために、里穂が身につけた技のよつなものだつた。

悲しみや怒りを封じ込め、空っぽの器のようになつてしまえば、何をされても言われても傷つかないから。

むしろ今日は、心が弾んですらいる。

明日が里穂の誕生日だからだ。

(明日はきっと、お父様にお会いできるわ)

麗奈と煌の実父にあたる花菱家当主——里穂の養父である稔は、毎年誕生日に、何かしらのプレゼントをくれた。

麗奈への豪華なプレゼントとは違い、ハンカチなどの小物ばかりだったが、それでもあらゆる人々からないがしろにされている里穂にしてみれば特別で、天にも昇る心地だつた。

稔の存在だけが、里穂の心の支えだ。

いや、稔だけではない。もうひとり——

「里穂」

頭上から声が降ってきて、必死に寒さに耐えていた里穂は顔を上げる。

薄水色の傘を手にした、肩までの黒髪の少女が、うずくまる里穂を見下ろしていた。  
眼鏡の奥の瞳が、心配そうに揺らいでいる。  
「亞香里……」

ちゅう来ちゃうんだ。でも、今日は来てよかつた』

亞香里は、里穂の同級生であり、親友だ。

亞香里の存在に、里穂は今まで何度も救わってきた。

近所に住んでいる亞香里と出会ったのは、里穂が花菱家に来て一年目の頃だつた。今と同じように寒空の中放り出されていたところを、優しく声をかけてくれたのだ。それ以来、いつも里穂を気にかけ、またひどい目に遭つていやしないかと、時折花菱家の近くまで様子を見に来てくれた。亞香里は、麗奈が里穂にしていることも、煌の素顔も、すべてを知つている。

「こんなところにいたら凍え死んじゃうよ。私の家に行こう

亞香里は、里穂を自宅に連れ帰つてくれた。

一般的なサラリーマン家庭である亞香里の家は、二階建ての一軒家だ。

深夜にもかかわらず、入浴させてもらい、熱々のおでんまでご馳走になつて、凍えていた里穂の体はすっかり温まつた。

濡れた制服は、亞香里のお母さんがドライヤーで乾かしてくれた。亞香里の家族も里穂の事情を知つていて、いつだつて歓迎してくれる。

部屋着を貸してもらい、シングルベッドにともに入つた。

「本当にありがとう。——いつも、こんなありきたりのお礼しか言えなくてごめんね」

「そんな堅苦しいこと言わないで！ 友達でしょ？」

親友の笑顔を見て、里穂も久しぶりに微笑んだ。

亞香里は、学校でも里穂の味方でいてくれる。

結果としてリーダー的存在の麗奈に歯向かうことになり、里穂と同じくほかの生徒達から冷遇されていた。

それでも、亞香里は里穂から離れようとはしなかつた。

自分に関わると立場が危つくなるからと拒んでも、意に介さない。

そんな亞香里の真つすぐな優しさと強さを、里穂は心から尊敬している。  
弱くてみじめな自分にはないものだから――

「それでも、本当にひどい人達ね。こんな寒い日に外に追い出すなんて、信じられない」

亞香里が、語気を強めて言つた。

「やっぱり、あんな家出て、うちで暮らそうよ」

そう誘つてくれた亜香里に、里穂は遠慮がちにかぶりを振る。

里穂には、あの家を離れたくない理由がある——稔の存在だった。

七年前、養護施設で初めて稔に話しかけられたときのことを、今でもはつきり覚えている。

『君と家族になりたいんだ。花菱家の娘になつてくれないか?』

親の顔すら知らずに育つた里穂にとって、それは夢のような言葉だった。

家族など、それまではお話の世界のことだと思っていたから。

やつと手に入れた、憧れの家族。

決して想像どおりではなかつたけれど、稔だけは、今でも里穂を家族の一員として必要してくれている。そうでなければ、誕生日にプレゼントをくれたりはしないだろう。

自分を家族と呼んでくれた彼を裏切るような行為だけはできない。

「悪いのは私の方なの。だから、もっと頑張つてみるね」

里穂が弱々しくてみじめだから、稔以外の家族に嫌われているのだ。麗奈のように愛らしく活発な少女だったら、状況は違つていたはず。

稔の期待どおりにできなくて、申し訳なく思つてゐる。

「そんなわけないでしょ! 里穂は充分いい子だよ!」

「ううかな? ありがとう」

里穂は力なく微笑んだ。どんなに否定されても、里穂がみじめなのは変えようのない事実なのに、亜香里はいつも否定してくれる。それほど優しい子なのだ。

「……とにかく、今日はもう寝よう。明日早起きして、裏門に戻ればバレないでしょ?」

「うん、そうだね。いつも本当にありがとう」

「だからそういうのいひつてば。おやすみ、里穂」

「おやすみ、亜香里」

目を閉じ、心の中でもう一度亜香里に感謝する。

それから、再び稔のことを思つた。

(明日は、どんなプレゼントをくださるのかしら)

おこがましいと思いながらも、期待で胸が高鳴る。

一年に一度の誕生日を支えに里穂は生きていると言つても過言ではない。

(お父様に、早くお会いしたい。最近は、まったく会えていないもの)

——そのときの里穂は、わずか一日のうちに、淡い期待が見事に打ち破られ絶望に落とされるとは、想像もしていなかつたのである。

翌日、里穂は十七歳の誕生日を迎えた。

思つたとおり、就寝前に稔の部屋に来るよう、使用人づてに伝えられる。期待に胸を弾ませ、里穂はいそいそと奥座敷に向かつた。

「里穂です」

「入りなさい」

「失礼いたします」

襖を開けると、十畳二間続ぎの和室の最奥に座した稔が、口元の髭を撫でながら笑みを向けてきた。橙色の四角い行燈だけがたよりの部屋はひどく薄暗い。壁に添つて置かれた衣文掛けには、まるで死に装束のような真っ白な着物が掛けられていた。

「やあ、来たね」

「お久しぶりです、お父様」

「ああ。なかなか会えなくて申し訳ない。仕事がちょっと立て込んでいてね」  
多忙な稔が、この屋敷にいることはほんとない。久しぶりに稔に会えて、気持ちがいつになく昂っているのを里穂は感じていた。

「今日は、お前の十七歳の誕生日だつたな」

「はい」

里穂は、はにかみながら微笑んだ。

「覚えてくださつていて、嬉しいです……」

「当たり前だろう。私が娘の誕生日を忘れるわけがない」

「はい……」

慣れない笑みを浮かべる里穂を、稔がにこやかに見つめている。

けれども彼が次に発したのは、里穂がつゆほども想像していなかつた言葉だつた。

「そこで、だ。今日を最後に、里穂にはこの家を出ていってもらいたい。もちろん、花菱家の娘としてだ」

里穂は一瞬、稔が何を言つたのか理解できなかつた。

例年のように、おめでとうの言葉とともに、何かしらのプレゼントをもらふると

思っていたから。

「……娘として、家を出ていく……？」

ひょっとして、悪い夢でも見ているのだろうか？

動搖で、声が震える。

「どうだ。これまでの経緯を話そう。なに、難しい話じゃないから安心しなさい」

放心状態の里穂を意に介することなく、稔は淡淡と語り始めた。

かつて、花菱家の当主は、あやかしの帝を説得し、人間界におけるあやかしの悪行の一切を禁じた。

一般には知られていないが、その裏で、実は他にも約束が交わされていた。

それは、百年に一度、人間があやかしに生贊いけばえをささげるというものだった。

人間の言うことを聞く代償のひとつとして、あやかしの帝が要求したらしい。

そして今年が、そのちょうど三百年目に当たる。

ただし、生贊いけばえは誰でもいいわけではない。

花菱の名を語る者。そして若い娘。

それが、あやかしの帝が所望した生贊いけばえの条件だった。

「だから私は、麗奈が生まれたとき、絶望したのだよ。ちょうど三百年目を迎える年に、麗奈はうら若き乙女に成長しているわけだからね。男だつたらよかつたのにと、どんなに悔やんだか」

そのときの気持ちを思い出すように、稔が苦渋の表情を浮かべる。

「だが、あるとき気づいたのだ。なにも麗奈である必要はない。花菱家の娘を、もうひとり増やせばいいのだと」

声高に放たれた稔の言葉を、里穂は心ここにあらずのまま聞いていた。

「……つまり私は、麗奈の代わりに生贊いけばえになるというわけですか？」

「そういうことだ。理解が早くて助かるよ」

いけしやあしゃあと答える稔が、得体の知れない怪物のように思えてくる。  
天涯孤独の里穂を家族と呼び、優しく接してくれた恩人。

そんな彼に抱いてきた親愛が音を立てて崩れ、ズタズタに引き裂かれた心だけが残された。

（そつか、そつよね……）

前々から、違和感は抱いていた。

稔は目の前で里穂が理不尽にぶたれていても、まるで見えていないかのように振舞っていた。亜香里のように、手を差し伸べてくれたことなど一度もない。

だがその理由を探つたら、自分を保てなくなる気がして、里穂はわざと考えないようしてきた。

とどのつまり、生贊に過ぎない里穂の扱いなど、稔にとつてはどうでもよかつたのだ。

来るべき日に備え、家畜のごとく、ただ銅つていただけなのだから。

かわいい愛娘、麗奈を守るために――

(そういえば昨日、煌から家畜以下の扱いを受けたつけ)

こんな状況だといふのに、喉の奥に笑いが込み上がる。

(ああ、もう。何もかもがどうでもいい……)

「理解できたなら、そこの着物に着替えて、裏山の社殿に向かってくれ。案内は用意してある」

「――はい」

稔という心の支えを失つた今、里穂にはもう、生きる気力などなかつた。

そして意思を持たない人形のような目で、彼の指示に従つたのである。

花菱家の裏手には、標高七十メートルほどの、丘と見まがう山がある。

入口には、呪符のような紙が大量に掲げられた木が鬱蒼と茂り、昼夜問わず、不気味な雰囲気を放つていた。

花菱家の私有地であるそこは、当然一般人の進入が禁止されており、一族ですら限られた人間しか入れない。

もちろん里穂も、今まで一度も足を踏み入れたことがなかつた。

白い着物に着替えると、巫女のような恰好をした見たことのない老婆が部屋に現れた。どうやら、彼女が案内人のようだ。

屋敷の裏口から山の入口へと導かれる。ひと言も言葉を発さない老婆の後ろに従い、里穂は雑草の生い茂る山道を進んだ。

闇は深く、空に浮かぶ蜜柑色の月の明かりだけが、唯一の道しるべだ。やがて、山の中腹に、朽ちかけた小さな社殿が現れた。老婆に促されるまま、社

殿の中へと入り込む。里穂が板の間に座り込んだのを見届けると、老婆は扉を閉め、何も言わずに立ち去つた。

窓のない社殿内は、右も左も分からぬほど真つ暗だ。そのうえ身を切るように寒い。

そのため、里穂はひつきりなしに震えていた。

生きる希望を失つた今、生贊として命を奪われるのは怖くない。

心残りは、亜香里だけだ。

（亜香里、大丈夫かな……）

里穂の突然の失踪を、稔はうまく取り繕うだろう。

だが、学校で亜香里はひとりになつてしまふ。

そうなると、麗奈の標的が、里穂から亜香里に移るのではないだろうか。

亜香里にはあれほど助けられたのに、助けてあげられないなんて。

里穂は、非力な自分をことごとく呪つた。

——こんな役立たず、あやかしの生贊になつて食べられるくらいがちょうどいい。

どれくらい、時間が過ぎただろう。

震えながらそのときを待つていた里穂は、ふいに異変に気づいた。  
底冷えの寒さが、いつの間にか消えているのだ。

暑いわけでも寒いわけでもない、感じたことのない温度感。

違和感に戸惑つているうちに、ギイ……と扉の開く音がした。

ただし、里穂が入ってきた扉とは反対側から。

入つたときはたしかに壁だったそこに、いつの間にか扉が出現している。

開いた扉の先には、青白い光がぼうつと見えていた。

（ここが、あやかしの世界……？）

「どうぞ、こちらに」

判断をつけかねていると、青年のような声がした。

里穂は這うように板の間を進み、恐る恐る扉の向こうを覗き込む。

社殿の外には、だだつ広い平地が広がっていた。夜だつたはずの空は、夜明けのような色に染まり、辺り一面霧が満ちている。等間隔に石灯籠が並ぶ砂利道の先には、黄金色に輝く広大な和風の屋敷があつた。

「あちらの御殿で、朱道様がお待ちしております」

横から声がして、ハツと顔を向けると、女性的な面立ちをした、色白の美しい男がいた。見た目は、二十代前半といったところか。銀色の瞳に、指通りのよさそうな銀色の髪、生成り色の作務衣のような衣服に身を包んでいる。片方の耳では、真鑑の玉のついた細長い耳飾りが揺れていた。

けれども里穂の目を釘付けにしたのは、男の美しい容姿や時代錯誤な装いではなく、頭から生えた二本の角だった。

(これが、あやかし……)

ごくり、と唾<sup>つば</sup>を呞み込む。

男の方も、物珍しげに里穂を見つめていた。

緊迫した空気が、ふたりの間に流れる。

けれども張り詰めた空気は、男がでれっと顔を崩すと一変した。

「いやあ、どんなお嬢さんが来るかといきや、めちゃくちゃかわいいじゃないですか。朱道様ついてるなあ、いいないいな！」

すぐにも取つて食われるのではないかと身構えていた里穂は、男のチャラついた態度に拍子抜けする。

男はなおも、ベラベラと喋り続けていた。

「なんかいい匂いするし、超幸運ですよ。前のときなんかどえらい醜女<sup>しこめ</sup>が来て大変だったって話なのに。もし今回もそうだったら笑つてやろうと思つていたけど、うらやましいつたらありやしない。あ、もちろん前の帝のときの話ですよ！ それから、申し遅れました。僕、朱道様の側近の雪成と申します。以後、お見知りおきを」

「あ、はい……」

なんだかよく分からぬが、あやかしは、思ったよりも怖い生き物ではなさそうだ。今から食われる身でありながら、そんなことを思うのもおかしな気がするけれども。「さ、どうぞこちらへ。朱道様がお待ちかねです。お嬢さん見たら、かわいさのあまり腰抜かすんじやないですかねえ。えへへ、楽しみだなあ」

「少々お待ちくださいね。すぐに来られると思いますから」

雪成が御殿と呼んだ屋敷の一角、莊嚴たる和風庭園を臨む一室に通された里穂は、緊張の面持ちで正座<sup>まことに</sup>をしていた。床の間に色鮮やかな牡丹<sup>ぼたん</sup>の掛け軸が飾られた、高級旅館のような和室である。清涼

感に満ちた井草の香り漂う畠は、さらすべれひとつなく、隅々まで掃除が行き届いていた。

「ここで待つように告げたのに、朱道様、いつたいどこに行つたんでしょう？」

里穂の斜め後ろに雪成が座し、腕を組みながら小声で文句を言つている。

彼の口ぶりから考えるに、どうやら里穂は、朱道というあやかしの生贊になるようだ。

おそらくその朱道なるあやかしが、この世界の帝なのだろう。

(どんなあやかしなのかしら……?)

覚悟などとつくに決まつてゐると思つてゐたのに、今更のように恐怖心が込み上げる。

そのときだつた。

襖が急に乱暴に開き、里穂はピクッと首を縮ませた。

まがまがしい二本の角を生やした背の高い男が、戸口に立ち、威圧的に里穂を見下ろしてゐる。

見た感じは、二十代半ばといったところか。

切れ長の目に薄い唇の、端整な顔立ち。濃紺の着物を纏つた体躯は筋肉質だがスラリとしていて、匂い立つような男らしさを放つてゐる。

そして何よりも、里穂の目を奪つたのは、その燃えるように赤い髪と赤い瞳だつた。まるで烈火の中から生まれたような男である。

(彼が、私を食べるあやかしの帝……)

「主上。こんなにかわいらしいお嬢さんを待たせて、いつたいどこに行かれていたのですか？」

不服そうな雪成の声を無視して、朱道はドカッと里穂の前に胡坐を搔いた。

ひどく機嫌が悪そうだ。

——見れば見るほど、美しい男だと思った。

彼こそがあやかしの頂点に君臨する男だと、体中の細胞が察している。男にはそういつた、そこにあるだけで森羅万象を従えてしまうような、圧倒的な魅力があつた。

気づけば里穂は、彼に向かつて深々と首を垂れていた。

自分を取つて食つるのが彼ならいいと、本能が言つてゐる。

みじめな人生だったが、彼の体の一部になれるのなら、本望とすら思う。

「——どうぞ、お好きなどろからお食べくださいませ」

顔を上げ肅々と声を放てば、朱道の体がピクリと揺れた。

怪訝そうにこちらを見る、赤の瞳と目が合う。

雪成が、背後でブハツと盛大に噴き出した。

「お嬢さん、何か勘違いをしていませんか？ 朱道様は、たしかに見た目は怖いですが、人間を食べたりはしませんよ」

「え……？ でも、私は生贊なのですよね？」

「生贊？ ははあ、長い年月が経つうちに、人間達が勝手に解釈を変えてしまったようですね。そもそも人間って、ひどい味なんですよ。少なくともどう味つけしても、僕にはムリでした。人間達の自意識過剰具合には呆れてしまうなあ」

聞き捨てならない台詞を吐きながら、雪成が温かな笑みを浮かべる。

「あなたは生贊ではなく、朱道様の嫁として迎えられたのですよ」

「よめ……？」

つまり生贊というのは解釈の行き違いであって、すぐに命を奪われるようなことはないらしい。肩の荷が下りたのはたしかだが、だからといって嫁になれと言われても、

受け入れられるものではない。

放心状態のまま、朱道を見つめる。

相変わらず仏頂面の彼は、今度は里穂と目を合わさうとすらしなかった。

(こんな人の嫁なんて絶対ムリ……)

先ほどは、絶対的なオーラを放つ彼になら、食べられてもいいと本気で思った。

けれども、嫁となると話は別だ。何のとりえもない自分が彼の伴侶になるなど想像もつかないし、見たところ、彼の方でも里穂を歓迎している様子はない。

案の定、朱道が重いため息を吐いた。

「俺は、お前を嫁にするつもりなどまったくない」

——ほら、やっぱり。

わけの分からぬ縁談に納得がいくていいのは、彼も同じだったようだ。ブイツとあさつての方向を見ている朱道に、雪成がなだめるように言う。

「ですが、三百年前からの取り決めですから」

「知るか。前の帝が決めたことだろう？ 俺は嫁などいらん、人間界に送り返せ」

「まあまあ、よく見てくださいよ。めちゃくちゃ美しいお嬢さんじゃないですか」

「美しくなどない。体つきも貧相だし、魅力のかけらも感じない。お前の目は節穴か（ひど……。ていうか雪成さん、ハードル上げないでほしい）」

自分の容姿に自信などないが、初対面の相手に面と向かって否定されるのはさすがにこたえる。

「えええっ!? こんなかわいらしいお嬢さんを前によくそんなことが言えますねっ!? あなたの目こそ節穴でしょうつ!? 頭沸いてるんですかつ!?」

「うるさい、黙れ雪成。とにかく、そいつはなるべく早くに送り返せ」

吐き捨てるように言うと、朱道は立ち上がり、乱暴に襖を開けて部屋をあとにした。

「困ったお人だ」

雪成が、思案顔でブツブツ言っている。

そして里穂と目が合うと、気まずそうに瞳を揺らめかせる。

「……ということなので、僕は泣く泣くあなたを人間界に送り返さなければなりません。まつたくあの聖物にも困ったもんだ」

（また、人間界に……?）

雪成の言葉に、里穂はぞつとした。

里穂を蔑むときの、蝶子、麗奈、煌の顔が順々に頭に浮かぶ。

唯一の支えだった稔にもつとも残酷なやり口で裏切られた今、もはやあの家に里穂の居場所はない。いや、里穂が知らなかつただけで、ハナからそんなものはなかつたのだ。

（花菱家には戻れない。戻りたくない）

亜香里の家で暮らすという手もあるのかもしれないが、花菱家の人間に知られたら、何をされるか分からぬ。花菱家には、一般家庭をわけなくつぶせるほどの権力があつた。

思い悩んだ末、里穂は、雪成に向けてガバッと頭を下げる。

「どうか、私をこの屋敷に置いてもらえないでしようか？ 掃除も洗濯も、何だつてします。私にはもう、帰る場所がないのです……」

「え？ ちょ、顔を上げてくださいよっ！ 僕には、かわいい子に頭を下げさせる趣味なんてありませんから！ いや、悪くない！ 悪くないけども……！」

雪成が、慌てたように里穂の肩を支えて顔を上げさせる。潤んだ瞳で見つめれば、彼は見る見る顔を赤くした。

「まあ、でも、帰る場所がないのに送り返すのも酷な話ですよね。それに、嫁としてではなく、下女としてならいてもいいんじゃないですかね？ 朱道様に話をつけてみます」

「本当ですか？」

里穂は、ぱあっと顔を輝かせる。

「ええ、もちろん。なんなら、いつそのことあんな堅物じやなくて僕の嫁に……ゴホゴホッ。いや、今は気にしないでください」

何やらモゴモゴ言っていたが、どうやらこの屋敷に居座れる可能性はあるようだ。花菱家に戻るくらいなら、ここにいた方がよほどマシである。

「ありがとうございます、雪成さん……！」

里穂が笑みを浮かべると雪成は赤い顔のまま咳払いせきばらをし、「任せてください」と男前な声で返事をした。

その日のうちに雪成は朱道に話をつけてくれ、里穂は御殿で下女として働くことが決まった。

最初、朱道はなかなか首を縦に振らなかつたが、雪成はかなり粘つたらしい。朱道が身動きをとるのも困難なほどしつこく絡んだところ、ようやく承諾してくれたそうだ。

雪成の奮闘ぶりに、里穂は心から感謝している。

翌日、ここで暮らすにあたつて不便がないようにと、雪成が御殿の中を案内してくれた。

敷地内には、広大な和風庭園を備えた黄金の本殿の他に、六棟もの離れが建っている。

本殿は寝所や政所せんじゆとして、離れは兵舎や下男下女の住まいとして使われているらしい。

その他にも、湯殿や茶室、果樹園に竹林まであるようだ。花菱家とは比べ物にならない豪勢さに、里穂は言葉を失い、とんでもないところに来てしまったことを痛感した。

せわしなく働いているあやかし達の多くは、一見、人間と大差ない。けれどもよく見ると、頭に角が生えていたり、水搔みずなづきがあつたり、肌の色が青かつた。

あやかし鬼嫁婚姻譚 ～選ばれし生贊の娘～

たりと、どこかしら人間とは異なる部分があつた。時には、河童や猫やなど、一目であやかしと分かる者もいて、物珍しさに里穂はつい視線をキヨロキヨロさせてしまう。着物を着たあやかしが下駄をげた鳴らしながら歩き、牛車が行き交う情景は、まるで古き良き時代の日本にタイムスリップしたかのようだつた。

「御殿には、当代でもつとも力を持つあやかし、つまり帝が代々住まうことになつています」

三百年前、花菱家と決め事を交わしたのは朱道ではなく前帝であり、彼とは赤の他人のようだ。政権が代替わりしたものの、決め事だけがそのまま残されたのだろう。(だから朱道様は、百年に一度の嫁制度に納得がいってなかつたのね)

最後に本殿にある厨房ちゅうひょうに行くと、雪成は、真っ白な尻尾を持つ狐顔の中年女に里穂をたくした。

「里穂さんと離れるのは惜しいけど、僕は所用がありますので、ここでお別れです。あとは、下女頭の彼女が面倒を見てくられますから」

「分かりました。雪成さん、いろいろとありがとうございました」

「くれぐれも変な男に絡まれないでくださいね！」

去りがたいとでも言うように何度も後ろを振り返りながら、雪成がその場をあとにする。

狐顔の女が、横目でジロリと里穂を見た。

「人間の娘か、こりやめずらしい。この世界に迷い込んで、帰れなくなつたのかい？人間の言葉じや、『神隠し』というらしいけど」

「いえ、そういうわけではないんですけど……」

帝の生贊になるつもりが実は嫁候補で断られた——が居座ることになった、とは説明しにくい。

「ふうん、まあいいか。御殿のお勤めは甘くないよ。気を引き締めてがんばりな」「はい！」

こうして、里穂のあやかし界での新たな日々が幕を開けたのである。

あやかし界に、昼と夜の差はない。

空は一日中夜明けのよくな白群青色びやくくんじょういろをしていて、うごめ蠢く霧に覆われている。太陽も、雲も、月も星もない。

そのため、里穂はまず、昼夜の区別に戸惑った。

あやかし達は、肌に触れる大気の変化で当たり前のように区別していたが、人間の里穂にそのような肌感覚は備わっていない。そのうえ時計も存在しないので、何度か仕事に遅れて叱られた。

けれども、やがて三足鶏の鳴き声で区別がつくようになる。

三本の足を持つこの鳥は、採卵のために飼育されていて、里穂は一日目から餌やりと鶏舎の掃除を任せていた。

三足鶏は騒々しい鳥で、朝はコココと小刻みに、昼はクエックエットと陽気に、夜はホーホーと間延びした鳴き声を上げる。それに気づいてからは、以前よりもずっと暮らしやすくなつた。

三足鶏の世話だけではない。だだっ広い本殿の掃除に、庭掃き、大量の野菜の皮むき、井戸端での食器洗い、河童族の頭の皿の水替えまで、新人の里穂の仕事はいくらでもあつた。

息をつく間もないくらい働き、夜になると大部屋で死んだように雜魚寝ざぎこねをする。そんな毎日が、日まぐるしく繰り返されていった。

「お、その桶どこに持つていくんかい？ 運んでやろうか？ なに、遠慮するなつて！」  
「河童の皿の水替えだつて？ ちくしょう、あいつらしいなあ。オイラの世話も焼いとくれよ」

どういうわけか、里穂はあやかしの男達にやたらと人気があつた。

通りかかれれば声をかけられ、手を貸すからとしつこく付きまとわれ、お願ひだから笑顔が見たいと求められる。

男性に優しくされることに慣れていない里穂は、困惑するしかなかつた。麗奈のような女の子がもてはやされるのは分かるが、地味な自分がそんな風に扱われるなどあり得ない。

あやかしの美的感覚がおかしいのか、もしくは煌のように裏さかがあるのか。男達に優しくされるたびに不安になり、里穂はどんどん拳動けんどう不審になつていつた。

御殿で働くようになつてから、十日が過ぎた頃。  
里穂の周りで、異変が生じるようになつた。

まず、三時間かけて掃除したばかりの庭が枯れ葉で埋もれているという怪現象が起つた。おかげで掃除をやり直す羽目になり、夕食に間に合わなかつただけでなく、寝床に入るのがずいぶん遅くなつた。

次に、支給されたお仕着せが、入浴中に突然行方不明になつた。探し回つたがどこにもなく、大部屋の押入れに捨て置かれていた、誰のものかも分からぬボロボロのお仕着せを着るよりほかなかつた。

それ以外にも、里穂にだけ食事が支給されなかつたり、頭上から水を浴びせられたり、誰かに足をすくわれて転んだり。

そういつたことがあつたあとには、決まつてどこからかクスクスと女の笑い声が聞こえてくるのだ。

(どうやら、ここでも嫌われるみたいね)

里穂のみじめさは、あやかしをも不快にさせらるらしい。

「里穂さん、元気にしてますか?」

あるとき、鶴舎で餌えきやりをしてると、雪成がひょっこりやつてきた。

雪成はこうして、ときどき里穂の様子を見に来てくれる。

あやかし達の会話から得た情報によると、雪成は朱道の幼なじみにして第一の側近で、この世界ではそれ相応の地位にいるらしい。

「あ、はい。雪成さん、いつも気にかけてくださいありがとうございます」

雪成の顔を見ると、里穂は心がホッと和むようになつっていた。

親切なところがどことなく亜香里を彷彿とさせて、親近感を覚えるのだ。

すると雪成が、首を傾げながら里穂に近づいてくる。眉間に皺しわを寄せ、体を上から下までじつとり眺めるものだから、これには里穂も戸惑つた。

「あの、どうかされましたか?」

「随分ボロボロの着物を着てるなと思いましてね。僕が渡した着物、もうそんなになつちやいました?」

「あ、これは……」

「不当な扱いを受けていることを彼に話したら、改善されるのかもしれない。」

だが、出かけた言葉をぐつと呑み込む。

いびりに黙つて耐えることに、里穂は慣れすぎていた。

それに、騒動に発展してこの御殿を追い出されたらどうしよう、という思いが足枷

になる。

「その、掃除中に転んで、いただいた着物を泥だらけにしてしまいました。新しい着物が支給されるまでの間、古いものをお借りしているのです」

「へえ～。里穂さん、案外そそかしいんですね。いや～、でも里穂さんはボロを着ててもかわいいなあ」

デレデレとしている雪成が嘘に気づく様子はない。里穂はひとまず胸を撫で下ろす。

そのやりとりを、密かにあやかしの女達が見ていたことなど、知る由もなく――

その夜、ようやく仕事を終え、寝所である大部屋に行くと、どういうわけか里穂の布団がなかつた。

「あの、私の布団はどこに行つたのでしょうか？」

まだ起きていた女のひとりに聞いてみる。

だが、しつしとうように、すげなくあしらわれた。

「布団？ そんなもの知らないよ」

「でも、たしかに今朝まではあつたんです」

「しつこいね！ 知らないって言つてるじゃないか。とにかくここには、あなたの寝

る場所なんかないよ。あんたが来てから急に狭くなつて、皆困つてたんだ。荷物を持つて、納戸にでも移動しな。あそこなら誰も使つてないからね」

里穂は部屋から追い出され、途方に暮れた。

唯一の荷物である、ここに来るときに着ていた白い着物を胸に抱え、仕方なく下女の住まう離れの中を歩き回る。

（二）もかしこも満室だと断られ、結局最初の女が言つていた納戸に行くしかなかつた。三畳程度のそこは、畳の半分が積み重なつた箱で埋まつてゐる。布団などあるわけもなく、着物を布団代わりにして、眠りにつくことにした。

（ああ、なんて寒いの……）

あやかし界には、人間界と違つて、寒暖というものがない。寒くも暑くもない適温が、一年を通して続くそうだ。それなのに、不思議と室温が低かつた。

これなら廊下で寝た方がよほどマシだが、そんなところに寝転がつていたら、何を言われるか分からぬ。薄っぺらい着物を頭からかぶり、ガタガタ震えながら、里穂はどうにか一夜を明かした。

その日から、納戸が里穂の寝床となつた。

一晩中体が冷やされ、なおかつ寒さによる睡眠不足のせいで、体調はみるみる悪化した。微熱が続き、手元がおぼつかず、しおつちゅうぶらつく。当然のことながら仕事の効率も下がり、そのたびに叱られ、精神的にも追い詰められていった。

そんなある日のこと。

大広間で催された宴の席に、里穂も配膳係として呼ばれた。

里穂にはよく分からぬが、その日はあやかしにとっては大事な祭りの日らしい。

招待されているあやかし達は、皆上質な着物を着ていて、この世界の重鎮であることがうかがえた。そしてそれぞれが、芸子のような化粧の厚い女を横にはべらせ、デレデレと鼻の下を伸ばしている。

上座には、久々に見る朱道がいた。

彼の両脇にも、艶やかな着物に身を包んだ花魁のような女がいて、しきりに甘い声をかけている。けれども朱道は女の呼びかけには無反応で、片膝をついて黙々と、盃に口をつけていた。

(どうしよう、こわい……)

初対面での威圧的な態度のせいで、里穂は彼に苦手意識を持つていた。

これまで運よく出くわさなかつたが、今宵はそういうわけにはいかない。小鉢を配りに来たのだが、位順に配膳せねばならず、当然のことながらまずは朱道からだつた。

盆を手に、朱道の斜め向かいに座す。

気づかれなければいいのにという願いも虚しく、すぐさま刺すような視線を感じた。

「お前、まだいたのか」

膳に小鉢を置くと同時に声がした。

声色の冷たさに、喉が塞がつたような心地になる。

盃をべくいと岬つてから、朱道は続けた。

「雪成がしつこいからここに残ることを許したが、長くいていいわけではない。早く花菱の家に戻れ。大名の血を引くあの家の方があのほど居心地がいいだろうに、なぜこんなところに居続ける?」

里穂は、何も言い返せない。

「あやかし界が物珍しいのか? だが、物見遊山気分でいられても困る。ここは人間

盆を持つ手が、カタカタと震える。

それほどに、この男が持つ威圧感はものすごい。

「もう一度言うぞ、ここはお前のいるべき場所ではない。分かったなら、数日以内に出ていけ。雪成に分からぬようにな」

睨むように里穂を見据える朱道。

燃えるような赤の瞳には、はつきりとした拒絶の色が浮かんでいる。

「なぜ黙っている？ 嘁れないのか？」

朱道が問うと、隣にいる女が、着物の袖口を口元に当ててクスクスと笑った。

いたたまれなくなつた里穂は、か細い声で「分かりました」とだけ答える。

そんな里穂をなおも冷たく見据え、朱道は配られたばかりの小鉢に手を伸ばす。

そのとき、彼が一瞬手を止めたように見えた。

けれども今の里穂はそんなことを気にする余裕などなく、逃げるようになんかの場を離れた。

心臓がドクドクと早鐘を打つている。

帝の彼にはつきりと拒絶されたのだから、これ以上ここには居座れない。  
里穂はもう、完全に行き場所を失つてしまつた。

※

(何だ、今のは)

あの里穂という人間の女が配つた小鉢を見つめ、朱道は内心動搖していた。小鉢に触れた際、まるで閃光が弾けたように、頭の中に映像が流れたのだ。

その映像の中で、下女達は、里穂が料理を盛つたばかりの器を意図的にひっくり返し、にもかかわらず、彼女がどんくさいせいで料理が台無しになつたとなじつていた。里穂は何も言わずに、床の掃除を済ませ、器に料理を盛り直していた。

——様々な能力を持つ朱道は、中でも、付喪神との対話を得意としている。

付喪神は、長い年月を経たものや愛用している道具に精霊が宿つたものだ。

付喪神に、姿形はない。声は出せても、言葉は持たない。

それでも彼らは、朱道だけに分かる言葉で語りかけ、時には記憶を見せてくれた。